

稲城市消防50年・70年のあゆみ

— 稲城市消防本部開設50周年記念 —

— 稲城市消防団発足70周年記念 —



わが街・稲城を守る—





稲城市特産の「梨・ぶどう」と市の花「梨」



緑が美しい城山公園



人口／90,464人 面積／17.97km²
 (平成30年10月1日現在)



稲城市のマスコットキャラクター
 (稲城なしのすけとヴェルディ君)

— 自然と調和し発展する街・稲城 —



京王よみうりランド駅上方から望む稲城の街



みはらし緑地から望む若葉台方面



稲城市消防本部



稲城市消防団

稲城市の安全・安心を守る

稲城市消防本部・稲城市消防団



稲城市消防周年記念フェスタ
平成30年7月29日
於：稲城市役所駐車場



稲城市長

高橋勝浩

発刊を祝して

本年は、稲城市消防団が昭和23年に稲城村消防団として発足以来70年、また、稲城市消防本部が昭和42年に稲城町消防本部として開設して以来50年という大きな節目の年を迎えることができました。

この節目の年を記念して、「稲城市消防50年・70年のあゆみ」を刊行されましたことは、誠に意義深いことであり、これまで稲城消防の発展にご尽力を賜りました関係各位に感謝申し上げます。

消防団は、昭和23年7月消防組織法の施行に伴い、従来の警防団を解散し、稲城村消防団として発足、昭和32年4月町制施行に伴って稲城町消防団と改称、団員定数を団長以下203人に改めました。

昭和46年11月市制施行に伴って稲城市消防団と改称、この年から消防操法審査会を開催し、平成30年に第30回の記念すべき大会を開催いたしました。

平成14年には多摩ニュータウン地域内に消防分団を新設し、市内8個分団となり、平成19年には消防団員定数を207人に改め、稲城市消防団災害支援団員制度を発足しました。

消防本部は、昭和42年12月に稲城町消防本部を開設、職員定数7人、救急自動車1台により消防本部事務を開始し、昭和45年4月に稲城消防署を開署、市単独消防として組織体制、施設整備等を含む消防力の強化を進めてきました。

この間、計画的な消防行政を図るため、平成8年に「稲城市消防基本計画」、平成18年には「第二次稲城市消防基本計画」を、また、平成28年には「第三次稲城市消防基本計画」を策定し、消防機動力となる消防車両などの装備や資機材の増強、消防職員の増員、さらに平成29年には上平尾消防出張所の開所や小型無人航空機ドローンを整備してまいりました。

一方、近年の災害状況は大規模地震をはじめ、地球温暖化の影響と見られる大型台風や局地的集中豪雨などによる水災害や土砂崩れなどへの対応が増え、また、日本の社会全体が高齢化の一途をたどるなかで、救急需要が増加するなど、消防の担う役割が今後もさらに多角的になると考えられます。

こうした状況にあって、国による「消防力の整備指針」の見直しが行われ、消防力の強化が要請されており、そうした消防をとりまく環境の変化を見極めながら、市単独消防として、そのメリットを生かし、消防団をはじめ防災関係団体と連携したなかで、各種災害活動、救急業務さらに防災関係業務を推進してまいりました。

本市の消防はこれからも、多くの先人とみなさまのたゆまぬ努力により幾多の災害や試練を乗り越え、市単独消防の発展に限りない英知と情熱を傾けてこられた伝統を引き継ぐとともに、さらなる消防行政の発展に取り組んでまいります。

結びに、みなさまのこれまでのご尽力に対し、改めまして感謝申し上げますとともに、本市消防の足跡を記録したこの小史が、稲城市の消防行政に対するご理解を深めていただくうえで、いささかでもお役に立てれば幸甚に存じます。



稲城市議会議長

北浜けんいち

稲城市消防団発足70周年・稲城市消防本部開設50周年を祝して

稲城市の消防が歴史と伝統のもと、この度、消防団が発足70年、消防本部が開設50年を迎えられましたことに対しまして、稲城市議会を代表して心よりお慶び申し上げます。

稲城市消防団におかれましては、昭和23年に稲城村消防団として発足されて以来、専門を営みながら地域住民の生命と財産、そして市民の安全と安心な生活を守るため、昼夜を分かたず献身的に消防・防災活動に従事されておりますことに対し深く感謝申し上げます。

消防団の役割は、災害から市民の生命や財産を守る重要な使命を担っており、「自分たちのまちは自分たちで守る」という崇高な使命感と郷土愛に対し、大いに敬意を表するものであります。また、団員のご家族の皆様には、消防団員の活動に対して御支援いただいておりますことを深く感謝するとともに、今後ともより一層の御支援をお願いいたします。

消防本部におかれましては、昭和42年に職員定数7人、救急自動車1台で消防本部を開設、昭和45年に消防署を開署し、現在では、消防出張所の整備や消防車両等の更新、資機材の充実を図り、1本部1署1出張所職員定数110名体制を築き、稲城市民9万人の生命、身体および財産を火災・災害から保護するとともに、これらの災害の被害を最小限にとどめるために消防団、稲城市災害防止協会や稲城市女性防火クラブ等の防災関係団体と連携し、熱意をもって稲城市の消防行政に尽力されてこられた方々に心から敬意を表するとともに感謝申し上げます。

近年の災害を顧みますと、火災のみならず大震災や台風、集中豪雨などの予期せぬ自然災害が全国各地で大きな被害をもたらしており、市民の消防機関に対する期待や指導的役割を一層求められるところとなっています。

このような状況にあって、稲城市の消防は今日まで消防防災関係者の不断の努力によって培われた市単独消防の特性を活かし、市内各地域の防災関係団体と有効に連携が構築されるなかで、消防体制の充実強化に努めてきた経緯を踏まえ、消防団70周年、消防本部50周年を契機にこれまでのよき伝統を継承し、市民が安全で安心して暮らせる稲城市となるよう、さらなる消防体制の推進を願っております。

稲城市議会といたしましても、消防団・消防本部をはじめとした各防災関係団体とより一層の支援に努め、稲城市の防火防災対策の万全を期する所存であります。

結びに、稲城市消防団、稲城市消防本部のさらなる発展を遂げられますよう、また、消防団員、消防職員並びにご家族の皆様のご健勝、ご多幸をご祈念申し上げお祝いの言葉とさせていただきます。



稲城市消防周年記念事業
実行委員会委員長

稲城市消防委員会委員長

上原健次

稲城市消防の発展を祝して

このたび、稲城市消防団が発足70周年そして稲城市消防本部が開設50周年を迎えられましたことに、心からお祝いを申し上げますとともに深く敬意を表するものでございます。

消防団70年の歴史を顧みますと、あの世界大戦後の社会全体が混沌とした時代、本市もまだ人口1万人足らずの小さな村であったころ、現在の基礎となる消防の組織が発足しました。

当時の資機材は手押しポンプが主流という状況でありましたが、日本の経済成長とともに町が発展するなかで消防団の体制も拡充され、やがて消防ポンプ車を採用する時代となりました。

村が町、市へと人口増加するとともに災害も増加していく状況のなか、火災や水害と多くの災害活動に消防団の力は欠かせないものであり、稲城の安全安心を確保するために大いに力を発揮されてきました。歴代の団長を中心として消防業務に携われた多くの団員の方々に改めて感謝の意を表する次第です。

一方、昭和42年に開設された消防本部は救急車1台で救急業務のみを開始しました。その後、町が発展し人口も増加するなかで、火災に対応する体制が図られ、ポンプ車をはじめとする消防資器材が次々と強化され、交通事故等により発生する救助災害に対応する救助工作車や、ニュータウンの建設や高層マンションの増加に対応する梯子車などが配備され、複雑多様化する災害すべてに対応できる消防組織へと発展いたしました。

消防委員会は昭和42年に発足以来、消防行政における課題を審議し、市へ意見具申を行ってまいりました。これまでに3次にわたる消防基本計画に具申された、消防資器材や設備の強化、女性消防職員の採用を含めた職員の増員が図られ、開設当時7名であった職員定数も110名へと大きく発展いたしました。

平成26年に消防委員会として市への建議を行った消防出張所の建設も、平成29年に実現し、長年の地域住民の念願であった消防署から遠い地域の災害対応が大きく改善されました。

このたびの慶事をひとつの区切りとして、これからも消防団、消防本部が一体となって稲城市の安全安心なまちづくりに取り組んでいかれるよう切に願っております。

記念すべき発足70周年、開設50周年を迎えるにあたり、稲城市の消防行政に尽力された各機関、団体の多くの皆様に改めて感謝いたしますとともに、ますますのご発展をご祈念し、お祝いのごあいさついたします。



稲城市消防団長

松本幸次郎

わがまち稲城を守る稲城市消防団

稲城市消防団発足70周年の節目にあたり、先人の消防団関係者の方々に敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。

稲城市消防団は、大正3年設立の稲城村消防組を前身として、昭和23年7月24日、消防組織法の施行に伴い、稲城村消防団が自治体消防として発足されて以来、地域の防災リーダーとして災害活動だけでなく、火災予防活動や応急手当の普及等と地域住民の生命、財産を守るため幅広く活動してまいりました。

私たち消防団員が、皆様とともにこの70周年という意義深い節目を迎え、さらに本書が発行できましたのも、一重に先輩団員諸兄による今日までの不断のご努力とご尽力、そして関係者並びに消防団員を陰で支えてこられましたご家族皆様のご支援の賜物でございます。

さて、わがまち稲城市は、多摩ニュータウン地域のさらなる発展や各地の区画整理事業、また、JR南武線の高架化や南山地域の開発など、都市基盤整備の進展により、人口や交通環境等が大きく変わり、全国で初めてニュータウン地域を担当する新たな消防分団として第八分団が発足され、8個分団編成となりました。

こうした変化に伴い、災害の形態も複雑化しており、加えて大地震をはじめ集中豪雨等による水災害や土砂崩れなど大規模災害の発生も危惧されております。

そこで、稲城市消防団は、これまでの伝統ある消防団活動を後世に継承しながら、火災はもとより震災等、大規模災害発生に備え、消防本部と連携すると共に、行政や市民および地域の防災関係団体と一体となり、あらゆる災害に向けた訓練の実施や地域の方々に対する防火・防災意識の高揚を図っていくことが重要であると考えます。

結びに、私たち稲城市消防団は、いかなる災害にも立ち向かい、市民の皆様の安心と信頼に応えられる消防団を目指して、さらに訓練に励み一層の努力精進に努める決意でありますので、今後とも皆様方のより一層のご指導、ご鞭撻をお願いするとともに、皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げ、稲城市消防団発足70周年のご挨拶とさせていただきます。



稲城市消防本部消防長

田中 誠一

稲城市消防50年・70年にあたり

このたび稲城市消防本部開設50年及び稲城市消防団発足70年の記念すべき年を迎えられたことを心から慶ぶとともに、先人や関係者の方々の御苦労に敬意を表し、感謝申し上げます。

昭和23年に警防団を解散し、稲城村消防団として発足6分団に編成され、手押しポンプ6台から始まった稲城の消防団、そして、昭和42年には稲城町消防本部を設置し職員7人、バンタイプ型の救急車を配置し、常備消防として救急・消防業務を開始しました稲城の消防本部。

消防本部開設当初、小規模であった消防体制が現在では、消防職員110人、消防ポンプ自動車2台、化学消防ポンプ自動車、救助工作車、梯子消防自動車および高規格救急自動車3台となり、この半世紀において稲城の消防機動力は飛躍的に向上されました。

平成3年の救急救命士法の施行を受け、平成5年度から順次救急救命士を養成し現在では各救急隊に救急救命士を配置し、救急現場において心肺停止やショック症状の傷病者に対して、高度な救命処置を行うことができる救急体制が構築されております。

昭和58年からは、交通事故や火災現場において、人命救助のスペシャリストである特別救助隊の養成を行い、現在では3部交替制勤務の各部に救助隊員を配置し、レスキューツールやクレーン等が装備された救助工作車が整備され、救助体制が構築されております。

また、平成29年度には、消防ポンプ自動車および高規格救急自動車を配置した上平尾消防出張所を開所し、市内全域の緊急自動車の到着時間を大幅に短縮することで、火災防ぎょ活動の早期着手による延焼拡大防止および救急要請された傷病者に対して、応急処置および早期医療機関への搬送など、大きな消防・救急活動の効果が表れております。

現在あるこの消防体制につきまして、幾多の各種災害を踏まえ、先人たちが市民の安全・安心を願い、その都度、英知をしぼり、困難を克服して消防防災関係者とともに計画的に消防機動力が築かれたものでございます。

近年では、全国各地で大規模地震をはじめ、大型台風や局地的集中豪雨などの自然災害の発生、また、強風下における延焼建物火災、大型倉庫火災や大規模な工事中建築物での火災など、大規模災害等に対する消防の行政需要はますます高まっています。

今後も稲城消防の歴史のなかで、培われた各種災害への防ぎょをはじめとする消防防災業務から得た経験を教訓に、消防精神である「市民のために」「市民とともに」のもと、全職員がより一層の結束を高め、消防団とより強固な連携を図り、市単独消防の本旨を踏まえて、崇高な職務に励んでまいり所存です。

結びに、関係者みなさまのこれまでのご尽力に対しまして、あらためまして感謝を申し上げますとともに、今後も市民が安全で安心して生活できる消防体制の充実強化に努めてまいりますので、継続したご支援・ご協力をお願いいたします。

歴代消防団長



初代消防団長

田中 清

[昭和22年7月 - 昭和38年12月]



第二代消防団長

石井桂治

[昭和39年1月 - 昭和45年3月]



第三代消防団長

青木武男

[昭和45年4月 - 昭和47年3月]



第四代消防団長

榎本 保

[昭和47年4月 - 昭和53年3月]



第五代消防団長

田中甚太郎

[昭和53年4月 - 平成2年3月]



第六代消防団長

上原健次

[平成2年4月 - 平成14年3月]



第七代消防団長

情野 亨

[平成14年4月 - 平成20年3月]



第八代消防団長

松本幸次郎

[平成20年4月 - 現在]

歴代消防長



初代消防長
加藤 貞二
(事務取扱)

[昭和42年12月 - 昭和46年7月]



第二代消防長
山田 元
(職務代理)

[昭和46年8月 - 昭和46年9月]



第三代消防長
川島 二郎
(事務取扱)

[昭和46年10月 - 昭和54年9月]



第四代消防長
井上 保

[昭和54年10月 - 平成3年3月]



第五代消防長
小泉 和男
(事務取扱)

[平成3年4月 - 平成3年4月25日]



第六代消防長
石川 良一
(事務取扱)

[平成3年4月26日 - 平成3年8月]



第七代消防長
西部 訓弘
(事務取扱)

[平成3年8月 - 平成6年12月]



第八代消防長
望月 潔

[平成7年1月 - 平成9年3月]



第九代消防長
中山 忠光

[平成9年4月 - 平成12年3月]



第十代消防長
渡邊高良
[平成12年4月 - 平成13年3月]



第十一代消防長
渡辺雅弘
(事務取扱)
[平成13年4月 - 平成14年3月]



第十二代消防長
岸野正行
[平成14年4月 - 平成17年3月]



第十三代消防長
市岡一彦
[平成17年4月 - 平成20年3月]



第十四代消防長
根岸成男
[平成20年4月 - 平成25年3月]



第十五代消防長
小泉昭彦
[平成25年4月 - 平成29年3月]



第十六代消防長
田中誠一
[平成29年4月 - 現在]

目次

— 稲城市消防50年・70年のあゆみ —

写真資料 —わが街・稲城を守る—

あいさつ・ご祝辞

稲城市長	高橋勝浩	6
稲城市議会議長	北浜けんいち	7
稲城市消防委員会委員長	上原健次	8
稲城市消防団長	松本幸次郎	9
稲城市消防本部消防長	田中誠一	10
歴代消防団長		11
歴代消防長		12

第1章 防災のあゆみ

消防団のあゆみ

消防団本部	16
第一分団（矢野口地区）	18
第二分団（東長沼地区）	22
第三分団（大丸・向陽台地区）	26
第四分団（百村・向陽台地区）	30
第五分団（坂浜・若葉台地区）	34
第六分団（平尾地区）	38
第七分団（押立地区）	42
第八分団（長峰・若葉台地区）	46

消防本部のあゆみ……………50

各防災関係団体のあゆみ

災害防止協会	53
女性防火クラブ	54
少年消防クラブ	55

第2章 防災活動

災害活動の記録

1 稲城市の災害活動	58
2 緊急消防援助隊活動	61

第3章 歴史資料館

消防年表	64
受賞歴	69
消防団歴代幹部	76

稲城市消防周年記念事業実行委員会組織図……………79

編集後記……………80

第1章

防災のあゆみ

消防団本部



消防団の現状

稲城市消防団は、本部1、分団8個分団、団員207名で組織され、団本部指揮車1台、ポンプ車8台、可搬ポンプ8台を装備し、各種災害に対応できる態勢を整えています。

また、消防団は地域の防災リーダーとして稲城市消防本部とともに、火災や風水害活動をはじめ、平素よりポンプ操法・水防訓練・上級救命講習・予防警戒や自主防災組織の防災指導など地域の中心的な役割を担っています。

団本部組織図 (8名)

団 長	松本幸次郎
副 団 長	馬場 芳則 (訓練担当)
	城所 達也 (庶務担当)
部 長	膳 崇訓
班 長	木村 嘉孝
団 員	香取遼太郎
団 員	和知 幸代
団 員	本澤姫菜子



平成26年（2014年）消防出初式 向陽台小学校



平成24年（2012年）田中甚太郎氏寄附金で購入した団本部指揮車



平成17年（2005年）
消防出初式（仮設消防訓練所）



歴代の消防団長



平成30年（2018年）8月29日
相馬市消防団交流事業



平成30年（2018年）
4月17日
三多摩消防団
連絡協議会長に就任



平成23年（2011年）
東日本大震災被災地現場視察（南消連災害対策視察研修）



消防署・消防団連携訓練



女性団員による
クラリネット演奏



平成29年（2017年）
消防団本部研修（高輪消防署・消防艇視察）



平成19年（2007年）4月1日に創設された災害支援団員（水防訓練の風景）

第一分団 (矢野口地区)



分団紹介

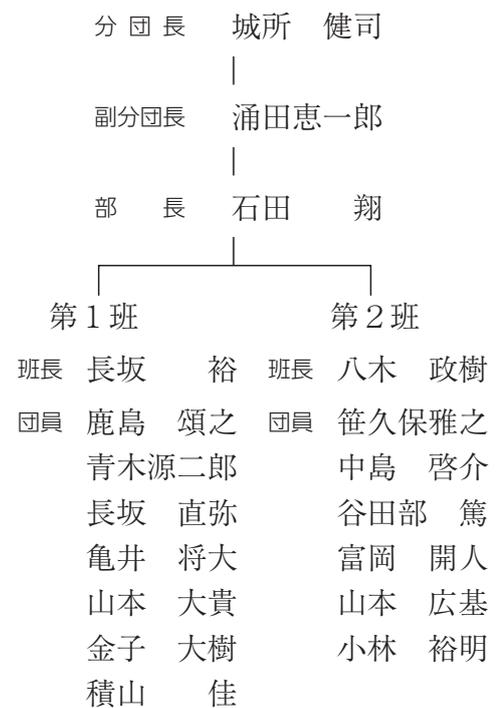
第一分団は、矢野口地区を管轄としており、10月1日現在で18名の団員で組織されています。

会社員・団体職員・公務員等が多くなっていますが、約6割程度が市内在勤者であるため、日中の火災に対して即座に対応できる状況にあります。

「皆で守ろうあなたの矢野口」、詰所のシャッターにも記されているとおり、各々が地元へ愛着を持ち、地域のために日々活動を行っています。

第一分団は、同じ地域を守る仲間同士の絆を大切に、良き伝統を後世につなげていながら、今後も団の活性化を図ってまいります。

分団組織図



2018年4月1日時点分団長：植松 孝之

第一分団 20年の記録



平成10年（1998年）消防団創設50周年記念消防操法審査会



平成16年（2004年）第23回消防操法審査会



平成17年（2005年）第35回東京都消防操法大会 優勝



平成18年（2006年）第24回消防操法審査会



平成20年（2008年）第25回消防操法審査会



平成22年（2010年）第26回消防操法審査会



平成24年（2012年）第27回消防操法審査会



平成26年（2014年）第28回消防操法審査会



平成28年（2016年）市制45周年 第29回消防操法審査会



平成29年（2017年）第47回東京都消防操法大会 優勝



平成30年（2018年）消防団発足70周年 第30回消防操法審査会



平成22年（2010年）第25回消防団員意見発表会 最優秀賞受賞



平成11年（1999年）矢野口大運動会



平成16年（2004年）稲城市ふるさと郷土まつり



平成19年（2007年）稲城第三中学校30周年記念式典



平成21年（2009年）支援団員との合同訓練



平成26年（2014年）矢野口地区防犯パトロール



災害活動



点検・訓練活動



平成29年（2017年）第47回東京都消防操法大会 優勝 祝勝会

第二分団 (東長沼地区)



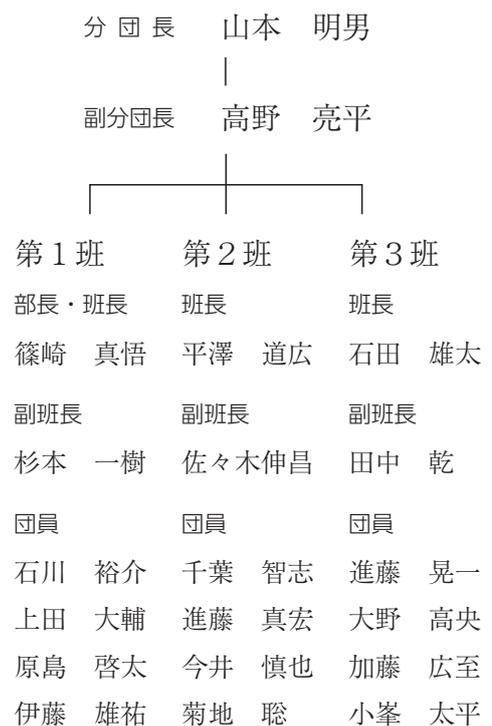
分団紹介

第二分団が担当する東長沼地区は北側に多摩川、中央部は市役所や消防署など重要な行政機関、そして南側には発展目覚ましい南山区画整理地域があります。

稲城市の中心とも言える東長沼を担当する第二分団はその重役を担う為に団員育成を重要視した研修や訓練を行っています。

平成29年より『学生団員』、『南山地区の団員』、『稲城市在勤の団員』の新たなメンバーを加え、古き良き伝統を守りつつ、次世代へ繋がる地域の防災リーダー育成の為に山本分団長を中心に稲城市唯一の3班体制で活動しています。

分団組織図



第二分団 20年の記録



平成10年（1998年）出初式 青渭神社にて



木遣りをあげながらの行進



平成4年～平成19年（1992～2007年）ポンプ車 ニッサン サファリ



平成10年（1998年）消防団50周年記念消防操法審査会（仮設消防訓練所）



平成14年（2002年）消防操法審査会優勝



平成19年～現在（2007年～現在）ポンプ車 いすゞ エルフ



第二分団詰所とポンプ車の移り変わり



平成25年(2013年) 研修旅行 岩手県陸前高田市



平成26年(2014年) 旧第二分団詰所



平成26年(2014年) 消防操法審査会第3位入賞



平成27年(2015年) 視察研修旅行 福島県相馬市



平成28年（2016年）新詔所地鎮祭・新詔所神棚引っ越し



平成28年（2016年）3月27日 第二分団詔所 完成披露祝賀会



平成30年（2018年）消防団発足70周年記念消防操法審査会（北緑地公園）

第三分団 (大丸・向陽台地区)



分団紹介

第三分団は現在、分団長以下15名で活動しており大丸地区と向陽台四丁目～六丁目を担当しています。分団としての活動は地域災害の敏速な対応、災害を想定した基本訓練を定期的に行い、その他では大丸・向陽台地区のお祭りや防災活動等の行事に積極的に参加しています。

今後想定される大震災に備えて各団員が地域の防災リーダーになれるよう意識を高め日々活動に取り組んでいます。

地域の皆さんとの連携もとれるよう日々のコミュニケーションを大切に安全安心な街づくりを目指します。

分団組織図

分団長 山本 讓
 |
 副分団長 大久保智洋
 |
 部長 石阪 一行

第1班	第2班
班長	班長
石川翔太郎	高野 悠樹
団員	団員
西村 岳志	千代 竜平
岩村 高志	川口 航
石原 新也	石田 秀康
渡辺 泳二	井口 雄司
岩泉 隆太	鈴木裕一郎

第三分団 20年の記録

平成10年～平成14年
(1998年～2002年)



消防団50周年時のポンプ車



消防団50周年記念式典 当時の分団長大久保雅行氏



消防団50周年記念式典



消防団50周年記念消防操法審査会



1998年当時の第三分団



平成12年(2000年)第21回消防操法審査会二位入賞



視察研修旅行

平成14年～平成29年
(2002年～2017年)



平成14年(2002年)～平成29年(2017年)11月まで活躍したポンプ車



塞の神水神祭 平成21年(2009年)1月



出初式行進(仮設消防訓練所)



夏祭り警備



平成22年(2010年)第26回消防操法審査会



平成14年(2002年)ポンプ車お披露目式



水防訓練(南山開発土地にて)



現在のポンプ車



平成30年（2018年）1月出初式への出陣式



大丸地区盆踊り出店



平成29年（2017年）ポンプ車お披露目式



大丸地区防災訓練 可搬ポンプ取り扱い指導



歳末特別警戒激励（第三分団詰所にて）



向陽台手作り市民祭り ミニ消防車乗車 子供たちとのふれあい

第四分団 (百村・向陽台地区)

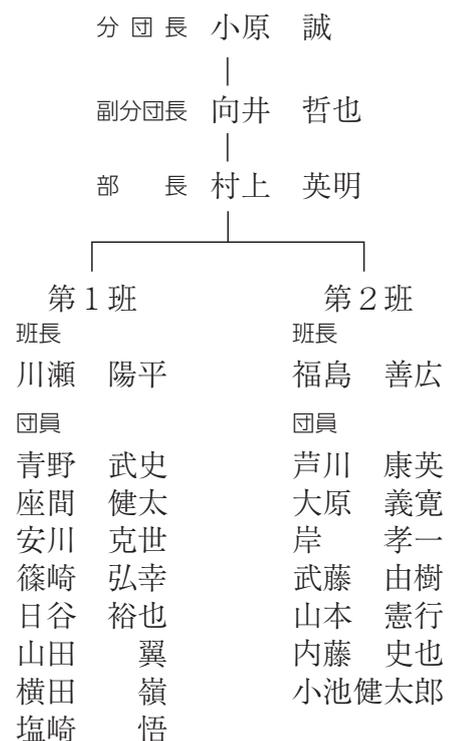


分団紹介

第四分団は百村地区と向陽台一丁目～三丁目地区を担当しています。十年以上団員不足に悩まされていましたが、平成30年度から総勢20名となり、充実した活動が行えるようになりました。第四分団のOBを中心とした支援団員と共に昼夜を問わず、実災害を想定した訓練をはじめ、地域の催事にも積極的に参加しています。

百村自治会、向陽台地区連合会との連携をより強固にしなが、日々の活動に励んでいます。

分団組織図



第四分団 20年の記録



平成21年（2009年）現行ポンプ車安全祈願 妙見寺



平成25年（2013年）火災想定訓練



平成26年（2014年）百村どんど焼き前の防火放水



平成26年（2014年）百村納涼盆踊り出店



平成26年（2014年）第28回消防操法審査会（北緑地公園）



平成27年（2015年）新入団員基礎訓練



平成28年（2016年）署隊との連携訓練



平成29年（2017年）豎神社例大祭警戒



平成29年（2017年）出初式出陣式



平成29年（2017年）手づくり市民祭りにて消防団のPR活動



平成29年（2017年）出初式にて徒列行進（向陽台小学校）



平成29年（2017年）出初式会場へ向け木遣をあげながらの行進



平成29年（2017年）消防特別警戒



平成30年（2018年）第四分団詰所前にて



平成29年（2017年）水防訓練における倒木切断訓練



平成30年（2018年）百村地区防犯パトロール

第五分団 (坂浜・若葉台地区)



分団紹介

現在、第五分団は団員数18名で坂浜・若葉台地区を担当しています。管轄地域は既存住宅地と新興住宅地が混在し、複雑多様化する災害に対応できるよう日夜訓練に従事し、「安全」と「安心」を提供できる強固な組織を目指しています。

また自治会をはじめとする関係団体と連携をとり、多くの方々のご理解、ご協力のもと消防団としての自覚と誇りを持って活動しています。

分団組織図



第五分団 20年の記録



平成7年～平成21年（1995～2009年）まで活躍したポンプ車



平成21年（2009年）現在のポンプ車お披露目



平成22年（2010年）消防相互応援協定を締結している川崎市麻生消防団黒川班との合同訓練



平成23年（2011年）第五分団としては20年ぶりに東京都消防操法大会に出場



平成27年（2015年）消防団員意見発表会に加藤翔団員が出席し優秀賞を受賞

春



平成25年（2013年）稲城第二小学校の児童に消防団に関する講義を実施



平成16年（2004年）第23回消防操法審査会（仮設消防訓練所）



平成24年（2012年）若葉台夏祭りにてポンプ車の乗車体験を実施

夏



平成22年（2010年）
坂浜自治会盆踊り大会の檣建てに参加



平成18年（2006年）坂浜自治会盆踊り大会に参加

秋



平成20年（2008年）坂浜地区運動会にて操法披露



平成28年（2016年）団員家族との懇親会



平成14年（2002年）天満神社秋季例大祭に参加



平成27年（2015年）坂浜自主防災訓練にて
可搬ポンプによる放水体験を実施



平成14年（2002年）出初式後の集合写真



平成28年（2016年）天満神社秋季例大祭の
大太鼓の搬送は第五分団が担当



平成29年（2017年）歳末特別警戒にて市長激励



平成25年（2013年）塞の神にて周辺への放水



平成15年（2003年）塞の神にて

第六分団 (平尾地区)



分団紹介

現在、第六分団は団員数18名で市内最南端・平尾地区の防災活動に当たっています。当該管轄地域では既存住宅地と団地に加え、近年は上平尾を中心に新興住宅地が加わる等、町の様相も大きく変わってきています。

それに伴い団員の構成も変化し、年齢層・正業の幅も広がり、団員同士お互いに新たな刺激を与えあっています。

自治会はじめ地元の各種団体・企業、何より住民の皆様と一致団結し「平尾を平尾の手で守る」ため活動に日夜邁進しています。

分団組織図

分団長 本田 真也
 |
 副分団長 鈴木 誠
 |
 部長 斉藤 功一

第1班	第2班
班長	班長
鈴木 栄作	馬場翔一郎
団員	団員
伊勢川泰央	佐川 秀弥
藤原 忠司	伊原 貴嗣
島田 裕基	加藤 武
長谷川真一	速水 晃
角田 昭文	遠藤 晃一
白井 一輝	吉田 広樹
安達 桃太	

第六分団 20年の記録



平成15年(2003年)
2型前のポンプ車では、年末夜警のサンタクロースも



平成16年(2004年) 2型前のポンプ車での、操法訓練の様子
(仮設消防訓練所)



平成18年(2006年)
出初式出発の挨拶。今は無くなった店舗が懐かしい



平成18年(2006年) 地域交流事業・
わんわんランドの合間に昼食休憩



平成24年(2012年) 出初式出発後は、
平尾中央通りを行進



平成24年(2012年) 平尾団地で発生した火災に出動



平成25年(2013年)
大雪が降っても消防活動に従事



平成25年(2013年)平尾小学校防災訓練では手押し井戸に汗が止まらず



平成26年(2014年)体力練成準優勝 六分団は攻守のバランスが自慢



平成27年(2015年)出身団員が多い第二中学校で、昔懐かしさを感じながらの防災訓練



平成26年(2014年)伝説の小樽消防犬と記念撮影



平成28年(2016年)仙台市立荒浜小学校等へ訪問



平成29年(2017年)新設の上平尾消防出張所にて最新式のポンプ車が納車された。併せて、新ポンプ車両の性能を関係各位に披露



平成29年(2017年)平尾団地の子供たちに、消火訓練を指導



平成29年(2017年)地元・杉山神社の例大祭では交通警備を担当



平成30年(2018年)年一度の分団研修旅行では、各地の災害対応を学ぶ



平成30年(2018年)ふれんど平尾でのどんど焼き



平成30年(2018年)団員家族との交流を深める大懇親会を例年開催

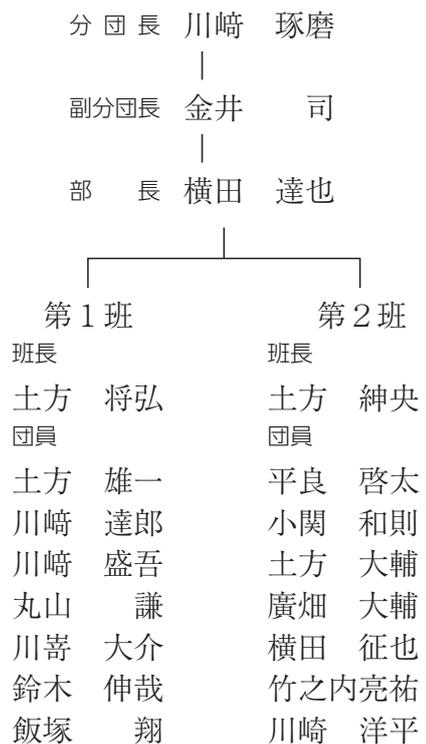
第七分団 (押立地区)



分団紹介

平成30年度現在、第七分団は団員数19名で押立地区を担当しています。地域内は梨畑が多く現役団員の中にも数名梨農家が在籍しています。また、管轄内に多摩川が流れていることから、市内分団で唯一ボートを保有し、災害の際は迅速な対応が出来るよう日頃より訓練を行い、自治会をはじめ多くの各種団体のご協力、ご理解を頂き消防団活動に誇りを持って活動しています。

分団組織図



第七分団 20年の記録



平成10年（1998年）島村神社お祭り



平成15年（2003年）出初式



平成16年（2004年）沖縄視察研修旅行



平成18年（2006年）第24回消防操法審査会



平成20年（2008年）団員結婚式



平成21年（2009年） 島守神社演芸大会



平成24年（2012年） 押立地区盆踊り大会



平成26年（2014年） 押立地区運動会



平成28年（2016年） 家族慰労会



平成29年（2017年） 新ポンプ車納車



平成30年（2018年）稲城第四小学校での消防団講義



平成30年（2018年）操法練習



平成30年（2018年）操法の日 詰所前にて



平成30年（2018年）消防操法審査会入賞お祝い会



平成30年（2018年）消防操法審査会後の視察研修

第八分団 (長峰・若葉台地区)



分団紹介

第八分団は平成14年、ニュータウン地域に誕生した新しい分団です。

現在、団員数15名で活動しており、女性団員や親子を含む20代から60代の幅広い年齢層で構成されています。

担当地区は多摩ニュータウンに属している長峰・若葉台地区であり、高層マンションや大型商業施設での災害に対応できるよう日々訓練に励んでいます。

また、地域の各種団体と連携して行事にも参加しており、協力し合いながら活動を行なっています。

分団組織図

分団長 伴 直樹

副分団長 北鶴 龍朗

部長 田中 俊平

第1班

班長
勝田 海斗

団員
森下 敏夫
伊藤 芳文
沼田 沙那恵
三ヶ尻章一郎
中田 中

第2班

班長
三ヶ尻 匠

団員
千賀 浩平
丸山 公一
中島 健介
寺澤 央未
林 哲也

第八分団 16年の記録



平成14年（2002年）第八分団発足式



平成14年（2002年）第23回初めての消防操法審査会

14年後…



平成28年（2016年）第29回消防操法審査会3位入賞！

平成15年（2003年）出初式（仮設消防訓練所）



平成14年（2002年）消防団にはじめての女性消防団員が入団





平成17年（2005年）長峰防災キャンプ



長峰小学校消防団見学



坂浜賽の神警戒

消防本部のあゆみ

昭和42年（1967年）

- ・「消防本部」を開設する。
- ・職員定数7名で救急自動車1台により救急業務を開始する。

昭和45年（1970年）

- ・「稲城消防署」を開設する。
- ・消防ポンプ車1台・査察広報車1台・小型動力ポンプ1台を配置し、消防力を強化する。
- ・東京消防庁と「消防相互応援協定」を締結する。

昭和48年（1973年）

- ・稲城市災害防止協会を設立する。

昭和49年（1974年）

- ・新消防庁舎において、消防業務を開始する。

昭和50年（1975年）

- ・救急医療届け出制度を開始する。

昭和55年（1980年）

- ・化学消防自動車を配置する。

昭和57年（1982年）

- ・稲城市婦人防火クラブを設立する。
- ・坂浜地区少年消防クラブを設立する。

昭和58年（1983年）

- ・押立地区少年消防クラブを設立する。

昭和59年（1984年）

- ・消防本部に消防救急指令装置・病院運用装置・無線統制台・救急用複信式無線基地局を配備する。

昭和60年（1985年）

- ・川崎市と稲城市「消防相互応援協定」を締結する。
- ・米空軍第475航空団と消防相互応援協定を締結する。

昭和62年（1987年）

- ・第16回消防救助技術関東地区指導会ほふく救出の部に出場し入賞する。

平成元年（1989年）

- ・消防庁舎の増改築工事を行う。（延べ1,525㎡）
- ・消防署に35m梯子消防ポンプ自動車を配置する。

平成4年（1992年）

- ・消防本部・署の組織改正を行い、3課5係となる。
- ・消防署に高規格救急自動車を配置する。
- ・緊急通報システムがスタートする。

平成5年（1993年）

- ・救急救命士隊の運用開始。

平成8年（1996年）

- ・消防署に緊急消防バイク1台および救助工作車を配置する。

平成9年（1997年）

- ・稲城市消防本部消防支援ボランティア発足。
- ・11月30日火災による死者ゼロ記録2,500日達成。
- ・2台目の高規格救急自動車を配置する。

※以上「稲城市消防50年のあゆみ」記念誌より抜粋



消防本部・消防署仮庁舎とポンプ車・救急車



昭和49年（1974年）消防本部新庁舎完成



平成元年（1989年）35m梯子消防ポンプ自動車配置



平成4年（1992年）高規格救急自動車配置



平成12年(2000年)

- ・緊急消防援助隊に消防部隊を登録する
(写真は総務省消防庁ホームページより)

平成16年(2004年)

- ・新潟県中越地震被災地へ緊急消防援助隊として稲城救助小隊4名、指揮隊2名及び後方支援隊で市役所職員3名出向する



平成15年(2003年) 4.1

- ・消防本部で、はじめての女性消防職員1名が採用される



平成22年(2010年)・緊急消防援助隊関東ブロック合同訓練が東京都で実施され、多摩会場の稲城市において154部隊865名が参加する



平成23年(2011年)

- ・東日本大震災に伴い福島県相馬市へ救援活動に出場する

平成27年(2015年)

- ・台風18号に伴い、被災地である茨城県常総市へ緊急消防援助隊として消防職員18名が救援活動に出場する

平成29年(2017年)

- ・稲城消防署上平尾消防出張所を開所し、消防ポンプ車1台、高規格救急車1台を配置する



各防災関係団体のあゆみ

稲城市災害防止協会 会長 奈良部義彦

稲城市消防団発足70周年並びに稲城市消防本部開設50周年を迎え、誠に喜ばしく、心からお祝いを申し上げます。

消防団におかれましては、昭和23年3月に本市に誕生し、また消防本部におかれましても、昭和42年12月に開設されました。

稲城市災害防止協会は、昭和48年5月、市内事業所の有志により「防火思想と火災予防の徹底を図り、災害による被害を防止し人命の安全に寄与すること。」を目的として、自衛を主体とした団体として組織され、会員皆様の努力と消防署のご指導、ご支援、防災関係団体と相互協力により、今日まで発展してまいりました。

当協会は、設立当初の防火思想の理念に基づき、事業所の防火・防災は勿論のこと、市民一人ひとりが正しい防火・防災思想を持ち、有事の際に行動し協力できることを目指し、市主催の地域防災訓練をはじめ、火災予防運動での広報活動や「Iのまちいなぎ市民祭」での火災予防の普及、防災関連団体へ

の協力・支援並びに一般市民や防火管理者、危険物取扱者を対象とした研修会を長年実施するなど、地域防災力の向上に努めてまいりました。

また、近年では各種イベントにおいて、ミニ消防車を導入した防火防災PRの実施や、イベント会場での火気使用器具等からの出火防止対策として、消火器の貸出事業を行うなど、多くの市民に対し火災予防を推進しており、今後も多くの事業を展開し、火災予防や近年発生が危惧されている多摩直下型地震、台風、豪雨災害を見据えた備えを、災害防止協会の会員皆様とともに推進していく所存です。

結びに、消防団、消防本部がこの周年記念を契機といたしまして、災害のない街稲城をめざし、さらなる発展を遂げられますことを祈念いたしましてご挨拶といたします。



消防出初式（徒列行進）への参加



定期総会

稲城市女性防火クラブ 会長 井上タカ子

稲城市消防団発足70周年並びに稲城市消防本部開設50周年にあたり、稲城市女性防火クラブを代表いたしまして、お祝い申し上げます。

稲城市女性防火クラブは、昭和57年11月に市内在住の家庭の主婦が中心となり、稲城市婦人防火クラブとしてクラブ員43名で発足し、「自分の家庭は自分で守る。」「自分達の街は自分の手で守る。」を合言葉に活動を始め、クラブ員は平成30年4月現在74名となりました。

平成16年には、女性なら誰でも入れるように「婦人防火クラブ」から「女性防火クラブ」に名称を変更し、防火・防災意識の普及啓発を目的に火災予防運動期間中の広報活動、住宅用火災警報器の設置維持管理の促進、防災訓練への参加、防火・防災および視察研修会の実施、応急手当の普及など、「自助」「共助」の一端を担う活動を実施しているほか、市内一斉防犯パトロールへの参加など、防犯活動にも力を入れ、女性防火クラブとしての活動の場を広げ、クラブ員一同が地域リーダーとして活躍できるように活動してまいりました。

この度の輝かしい、消防団発足70周年並びに消防本部開設50周年の節目を迎え、消防団・消防署・女性防火クラブ、防災関係団体と手を携えて、強固な防火防災・防犯体制を構築するために、今後も日々努力し、安全・安心の普及啓発のために邁進してまいります。



女性防火クラブ総会



消防出初式（徒列行進）への参加



防火・防災研修会のもよう

稲城市少年消防クラブ

少年消防クラブでは、坂浜・押立地区の2地区でクラブが組織されており、防火・防災についての学習を通じて生命と暮らしを守ることの大切さを学び、社会的徳性を養い、健全な少年・少女の成長と将来の地域防災リーダーの育成に努めています。

【坂浜地区少年消防クラブ】 委員長 大塚 謙一

稲城市消防団発足70周年並びに稲城市消防本部開設50周年、誠におめでとうございます。

坂浜地区少年消防クラブを代表して、お慶び申し上げます。

坂浜地区少年消防クラブは、昭和57年4月に「自分達の地域は、自分たちの手で」をスローガンに坂浜地区の小学校で発足いたしました。

設立当初より幼児教育の重要性を鑑み、防火・防災の知識、技術を学び、身に付けるため、防災訓練や出初式の参加、火災予防運動時のポスター集会や冬季体力練成など、各種の事業を行っております。



消防署で救助訓練を体験

【押立地区少年消防クラブ】 委員長 安達 剛

稲城市消防団発足70周年並びに稲城市消防本部開設50周年を迎えられたこと心からお祝い申し上げます。

押立地区少年消防クラブは、昭和58年12月に青少年対策地区委員会等各種団体の協力を得て発足しました。設立時より「少年・少女が防火に必要な知識を習得し、団体生活の規律を通して、社会に奉仕する礼儀正しい立派な社会人に成長していくこと」を目的とし、防災訓練、出初式に参加するとともに坂浜地区との合同防災研修、防災関連施設の施設見学や火災予防運動時の広報活動を実施するなど、防火・防災についての知識、技術を学んでいます。



消火訓練を体験するクラブ員

第2章

防災活動

災害活動の記録

1 稲城市の災害活動

JR南武線大丸踏切北側で全焼2棟、半焼1棟、部分焼3棟の大火

平成18年10月22日 日曜日 22時32分頃発生

稲城市大丸2211番地、浦野製作所から出火し、隣棟間隔が1mと極めて近接していたことなどから隣接する工場4棟、教会1棟、車両1台に類焼し大火となった。

稲城消防署8隊、消防団7隊、東京消防庁1隊が出場、消防職員の非番および週休者の招集、消防団第3出場により136名が出場し活動にあたり、出火から鎮火まで約8時間という長時間におよぶ消火活動となった。

出場した消防職員の見分調書では、現場到着時「ゴー」と音をあげ炎が数十メートルとも思える程激しく噴出しており、火勢が強く輻射熱で接近できない状態であったと見分している。



12階より出火した高層建物火災

平成18年11月26日 日曜日 10時28分頃発生

稲城市長峰三丁目8番地、都営長峰三丁目団地3号棟12階から出火した高層建物火災で稲城市では初めての高層建物火災である。

稲城消防署8隊、消防団4隊、東京消防庁1隊が

出場、消防職員の非番招集、消防団第2出場により65名が出場し消火活動にあたり、梯子車による梯上放水等により、1室約75㎡および外壁10㎡が焼損し出火から約3時間後に鎮火している。



稲城市役所 1 階放火火災

平成27年11月30日 月曜日 14時00分頃発生

稲城市役所 1 階事務室内に原動機付自転車で乗り付けた男が、保険年金課付近で灯油等を撒き、火を放ち、天井 4 m と椅子等の収容物、原動機付自転車 1 台が焼損した建物火災である。

男は、警察官が駆けつけた時には、刃物を振りかざしてパトカーを強奪し逃走を図ったが、市役所敷地内で警察官に取り押さえられ逮捕された。

男が灯油等を撒いた時点で、市役所職員が消火器を集めて火災対応したことや、屋内消火栓設備を操

作し放水を行ったことで、消防隊が到着するまでに自衛消防隊により鎮圧することができ、被害を最小限に抑えることができたことから、2日後には平常業務が開始された。また、職員の適切な避難誘導により、市民および職員に負傷者は発生していない。

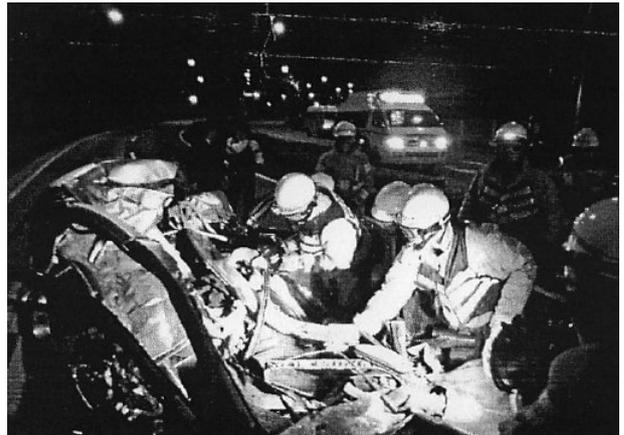


川崎街道上での交通救助事故 死傷者4名

平成28年1月1日 金曜日 1時16分頃発生

片側2車線の川崎街道を多摩市方面へ左カーブ走行中の乗用車が、高さ20cmの中央分離帯を乗り越え、対向車線を走行中の乗用車と正面衝突した交通事故により死傷者4名が発生した救助活動。

活動は、対向車の乗用車運転手を救助した後、車内に閉じ込められていた2名を油圧式救助器具を活用して救出し救急搬送されたが、2名が死亡、2名が重症となった。



2 緊急消防援助隊活動

新潟中越地震に伴う緊急消防援助隊派遣

平成16年10月23日 土曜日 17時56分発生

新潟県中越地方を震源として発生したマグニチュード6.8、震源の深さは13kmの直下型地震で最大震度7を観測した。新潟県下では多くの地域で震度6強から6弱を観測し、中越地方から関東地方にかけて広い範囲で大きな揺れを感じた。

強い揺れに見舞われた小千谷市、十日町市、長岡市等を中心に死者68名、家屋の倒壊約1万7000棟の被害をもたらした。

稲城市消防本部では、救助工作車および指揮車により職員6名を新潟県小千谷市に派遣し、東京消防庁ハイパーレスキュー隊と共にヘリコプター等を活用し孤立した地域から住民の避難および救出活動を実施した。



東日本大震災に伴う緊急消防援助隊派遣

平成23年3月11日 金曜日 14時46分発生

宮城県牡鹿半島の東南東沖130km付近(三陸沖)を震源として発生したマグニチュード9.0、震源の深さは約24kmで最大震度7が観測された日本周辺における観測史上最大の地震である。この地震によって、岩手県、宮城県、福島県の3県を中心とした太平洋沿岸部に大規模な津波が発生し、死者・行方不明者約18,000名を超え、1都1道10県で大きな被害が発生している。

稲城市消防本部では、福島県相馬市へ人命救助および給水活動を行うために、救助工作車、指揮車、給水車の3台、職員8名を発災翌々日の13日から派遣した。

災害現場では、相馬地区広域消防本部、自衛隊等と協力し松川浦地区でライフラインである救出活動

導線の確保と行方不明者の搜索活動、相馬市内の医療機関や避難所への給水活動を行った。



平成27年9月関東・東北豪雨災害に伴う緊急消防援助隊派遣

平成27年9月9日 金曜日発生

台風18号は9月9日に東海地方へ上陸したのち、同日日本海で温帯低気圧に変わったが、太平洋上から湿った空気が流れ込み、すでに発生していた台風17号から吹き込む湿った風とぶつかったことで、線状降水帯が継続して発生し関東地方北部から東北地方南部を中心に記録的な大雨となり甚大な被害をもたらした。

稲城市消防本部では、東京都隊として、全半壊家屋5000棟以上という甚大な被害を受けた茨城県常総市に消防車、救急車、後方支援車の3台、延べ人員18名を派遣し東京消防庁とともに救助・救急および

捜索活動、救援物資の搬送を実施した。

救助活動は、東京都隊として181名を救助、そのうち50名を稲城市消防本部が救助した。

捜索活動においては、東京都隊が699件実施し、そのうち稲城市消防本部が186件捜索を実施している。救急活動では、重症患者を含めた4名を病院へ搬送した。



第 3 章

歷史資料館

消防年表 (平成10年から)

	稲城消防年表	国内外の主な災害
平成10年 (1998年)	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和55年に整備された化学消防ポンプ自動車 (I型) をII型に更新する。 ・昭和58年に整備された消防ポンプ自動車を更新する。尚、装備品としてホースレイヤー及び動力梯子昇降装置を整備する。 ・消防署に指揮車1台を整備する。 ・稲城市消防団創設50周年、稲城市消防本部開設30周年記念事業を実施する。 ・向陽台地区に仮設消防訓練場を開設する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パプアニューギニア津波災害
平成11年 (1999年)	<ul style="list-style-type: none"> ・平成3年1月26日から平成11年4月14日まで火災による死者ゼロ3,000日を達成する。 ・第29回東京都消防操法大会ポンプ車操法の部において第一分団が入賞する。 ・向陽台地区の仮設消防訓練場に訓練塔を建設する。 ・消防職員定数を63名から66名に改める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東海村ウラン加工施設における臨界事故
平成12年 (2000年)	<ul style="list-style-type: none"> ・平成3年1月26日から3,317日間続いた火災による死者ゼロ記録が平成12年2月25日の火災において途絶える。 ・緊急消防援助隊に消火部隊を登録する。 ・コンピューター西暦2000年問題で特別警戒を実施する。 ・消防団長上原健次氏が東京都三多摩消防団連絡協議会会長に就任する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・有珠山噴火災害 ・三宅島噴火災害 ・鳥取県西部地震
平成13年 (2001年)	<ul style="list-style-type: none"> ・稲城市組織改正により、市部局から消防本部及び署に防災係を移管し、防災係の人員を含んだ消防本部の組織となる。 ・第30回消防救助技術関東地区指導会に消防本部からほふく救出の部及び基本泳法の部に出場し入賞する。 ・空気ボンベ充填機を整備する。 ・聴覚障害者専用の119番通報ファクシミリを運用する。 ・緊急消防援助隊の資機材を整備する。 ・消防団第二分団の仮設器具置場及び詰所が完成する。 ・天皇皇后両陛下の特別養護老人ホーム「正吉苑」行幸啓に伴う特別警戒を実施する。 ・米国の同時多発テロを契機とする特別警戒を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌舞伎町雑居ビル火災 死者44人、負傷者3人、焼損面積160㎡ ・インド西部地震 ・芸予地震 ・明石市花火大会集団死傷事故 ・米国・同時多発テロ事件
平成14年 (2002年)	<ul style="list-style-type: none"> ・消防団員定数を167名に改め、ニュータウン地区に第八分団を設立する。 ・消防本部庁舎の耐震工事を実施する。 ・昭和59年に整備された消防救急指令装置を廃棄し、消防緊急通信指令施設を整備する。 ・消防職員定数を66名から76名に改める。 ・平成2年に寄贈を受けた救急車を廃棄し、高規格救急車を整備する。 ・昭和62年に整備された消防団第三分団の消防ポンプ自動車を更新する。 ・緊急消防援助隊に救急部隊を登録する。 ・情野亨氏が第七代消防団長に就任する。 	
平成15年 (2003年)	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和63年に整備された消防団第七分団の消防ポンプ自動車を更新する。 ・長峰コミュニティー防災センター及び消防団第八分団詰所・器具置場・車庫が完成し開設する。(耐火造2階建) ・稲城市消防本部にはじめての女性消防職員1名が採用される。 ・稲城市民を対象とした災害情報及び地域安全(防犯)情報メールの配信が開始される。 ・消防庁舎施設として消防緊急通信指令施設非常用電源及び非常用発電機を整備する。 ・消防署に消防隊員用携帯警報器5基を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・十勝沖地震災害 ・宮城県沖地震

平成16年
(2004年)

- ・新潟県中越地震被災地へ緊急消防援助隊として稲城救助小隊4名、指揮隊2名及び後方支援で市役所職員3名出向する。
- ・消防団第八分団に消防ポンプ自動車を整備し、昭和63年に整備された消防団第六分団の消防ポンプ自動車を更新する。
- ・119番通報にI P電話4回線(平成電電・NTT・KDDI・日本テレコム)が追加され運用を開始する。
- ・通信指令業務を専従員化し運用開始する。
- ・消防団に消防用超短波無線陸上移動局(携帯)3基を整備する。
- ・第33回消防救助技術関東地区指導会に消防本部からほふく救出の部に出場し入賞する。
- ・南多摩水再生センター内に消防訓練場を整備する。
- ・元消防団長田中甚太郎氏が瑞宝双光章を受章する。

- ・新潟県中越地震
死者68人、負傷者563人
- ・ドン・キホーテ浦和花月店火災
- ・スマトラ島沖巨大地震・インド洋津波

平成17年
(2005年)

- ・第35回東京都消防操法大会ポンプ車操法の部において第一分団が優勝する。
- ・平成5年に配置された高規格救急自動車を廃棄し、新たに高規格救急自動車を整備する。
- ・水圧体験装置を考案作成し、市民指導に運用開始する。
- ・119番通報に携帯電話4回線(vodafone・NTT DoCoMo・KDDI・TU-KA)が追加され運用を開始する。

- ・福岡県西方沖地震
- ・JR福知山線列車転覆脱線事故
- ・パキスタン北部大地震

平成18年
(2006年)

- ・救急件数が平成3年以来(15年ぶり)前年を下回る。
- ・稲城市防災マップ・ハザードマップを全世帯に配布する。
- ・自動体外式除細動器(AED)のイベント・スポーツ大会等に貸し出し事業を始める。
- ・自動体外式除細動器(AED)を公共施設・学校・老人福祉施設等に設置し運用を始める。
- ・第二次稲城市消防基本計画を策定する。
- ・消防団長情野亨氏が第十四代東京都南多摩地区消防団連絡会会長に就任する。

- ・インドネシア・ジャワ島中部地震

平成19年
(2007年)

- ・消防団員定数を207名に改め、稲城市消防団災害支援団員制度が発足する。
- ・新潟県中越沖地震被災地へ給水車で職員3名が出向し、給水活動を実施する。
- ・第36回全国消防救助大会ほふく救出の部に、救助隊が出場し入賞する。
- ・平成4年に整備された消防団第二分団の消防ポンプ自動車を更新する。
- ・消防団各分団にトランシーバー3基を整備する。

- ・渋谷温泉施設爆発火災
- ・港区マンション火災
- ・兵庫県宝塚市カラオケボックス火災
- ・能登半島地震
- ・新潟県中越沖地震

平成20年
(2008年)

- ・火災、救急件数が前年を下回る。
火災13件(前年比-11件)救急2,973件(前年比-273件)
- ・救急トリアージ制度の施行を開始する。
- ・119番通報位置情報通知システムの運用を開始する。
- ・平成9年に日本防火協会から寄贈された小型動力ポンプ積載軽自動車1台を廃棄する。
- ・稲城ロータリークラブから広報車1台の寄贈を受け消防署に配置する。
- ・平成6年に整備された消防団第一分団の消防ポンプ自動車を更新する。
- ・富永重芳様からエアテント及び防災トラック1台の寄贈を受け消防署に配置する。
- ・消防団各分団にトランシーバー2基を整備する。
- ・松本幸次郎氏が第八代消防団長に就任する。
- ・災害防止協会会長山本英司氏が危険物保安功労者消防長官表彰を受賞する。

- ・中国四川省大地震
- ・秋葉原無差別殺傷事件
- ・岩手・宮城内陸地震

平成21年 (2009年)	<ul style="list-style-type: none"> 平成6年に整備された消防団第四分団の消防ポンプ自動車を更新する。 平成7年に整備された消防団第五分団の消防ポンプ自動車を更新する。 富永重芳様及び富永壽様から高規格救急自動車及び高度救命資機材の寄贈を受け消防署に配置する。 平成21年度を初年度とした3年間の家具転倒防止器具助成事業を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 杉並区居酒屋火災 死者4人、負傷者12人、焼損面積117㎡ 群馬県渋川市老人ホーム火災 死者10人
平成22年 (2010年)	<ul style="list-style-type: none"> 平成2年に整備した梯子車を廃棄し、東久留米市から梯子車を譲り受け消防署に配置する。 消防団が東京消防庁消防総監特別優良表彰として総監旗を受賞する。 消防団が東京都消防褒章を受章する。 緊急消防援助隊関東ブロック合同訓練が東京都で実施され、1都9県465部隊2,217名、そのうち多摩会場の稲城市においては、154部隊865名が参加する。 平成22年7月14日で火災による死者ゼロ2,000日を記録する。 	札幌市グループホーム火災 死者7人
平成23年 (2011年)	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災時に市内において震度5弱を観測し災害対策本部を設置する。 東日本大震災に伴い福島県相馬市に救援活動へ出場する。 東日本大震災に伴う消防応援活動が評価され総務大臣表彰を受賞する。 消防職員定数を76名から92名に改める。 第25回消防団員意見発表会（東京都）において、第一分団涌田恵一郎団員が最優秀賞を受賞する。 第41回東京都消防操法大会ポンプ車操法の部に第五分団が出場する。 元消防団長上原健次氏が瑞宝双光章を受章する。 前消防団長情野亨氏が瑞宝単光章を受章する。 平成23年12月20日～平成24年7月25日 東日本大震災を踏まえた大規模災害時における消防団活動のあり方等に関する検討会ワーキングチームに第一分団団員参加する。 	東北地方太平洋沖地震 死者行方不明者1万8,434人
平成24年 (2012年)	<ul style="list-style-type: none"> 消防本部及び署の組織改正により防災課を設置し、4課7係とする。 平成17年1月21日から2,822日間続いた火災による死者ゼロ記録が、平成24年10月14日の火災において途絶える。 平成8年に整備された救助工作車を更新する。 平成14年に整備された高規格救急自動車を更新する。 消防団活性化指定寄附金により、消防団本部指揮車を団本部に配置する。 消防団長松本幸次郎氏が第十六代東京都南多摩地区消防団連絡会会長・一般社団法人東京都消防協会南多摩支部支部長に就任する。 平成23年度全国消防団員意見発表会（日本消防会館 ニッショーホール）において第一分団涌田恵一郎団員が優秀賞を受賞する。 	中央自動車道笹子トンネル崩落事故 死者9人
平成25年 (2013年)	<ul style="list-style-type: none"> 平成22年に東久留米市から譲り受け配置した梯子車を更新する。 昭和49年に設置した自家用給油取扱所の全面改修工事を実施する。 避難所の早期開設を目的に地震自動解錠ボックスを市内6箇所に設置する。 東日本大震災における消防団活動を踏まえ、消防団が活用する救助資器材として、携帯用コンクリート破壊用具（レッドワン）を各分団に配備する。 個人装備品が収納できる災害活動用リュックサック及び水防活動等を行う消防団員の安全確保のため救命胴衣を整備する。 昭和63年に整備された防災行政無線機器の更新を開始する。併せてアナログ波からデジタル波への無線方式の変更を開始する。 	<ul style="list-style-type: none"> 台風26号による大島町土砂崩れ災害 死者36人、行方不明者3人 長崎県グループホーム火災 死者4人

平成26年
(2014年)

- ・平成26年度稲城市総合防災フェスタを開催する。(参加者2,261名)
- ・富永重芳様からのご寄附により除雪関連資器材(フォークリフト1台、スコップ375本)、防災関連資器材(避難所の無停電照明39施設、避難所運営用照明及びカセットガス式発電機19基)を整備する。また、消防団装備品として可搬式ウインチ、油圧ジャッキを購入し各分団に配備する。
- ・防災行政無線専用テレホンサービスを開設する。
- ・いなぎガイドマップ・防災マップを全世帯に配布する。
- ・消防団の福利厚生事業の充実として、消防団と商工会が連携して「消防団員サポート事業」を開始する。
- ・総務課は消防総務課に、庶務係は消防総務係に改正する。
- ・平成10年に整備された消防ポンプ自動車を更新する。
- ・消防団長松本幸次郎氏が一般社団法人東京都消防協会副会長及び東京都三多摩消防団連絡協議会副会長に就任する。
- ・平成15年度に建設した第八分団詰所を機能強化として増築工事を実施する。

- ・町田金属加工工場火災
- ・御嶽山噴火災害 死者57人、行方不明者6人、負傷者69人

平成27年
(2015年)

- ・従来の119番通報位置情報通知システムに加え、新発信地表示システムを導入し、統合型位置情報通知システムの運用を開始する。
- ・高規格救急自動車1台を整備する。
- ・消防・救急デジタル無線を整備する。
- ・消防緊急通信指令施設を更新する。
- ・台風18号に伴い、被災地である茨城県常総市へ緊急消防援助隊として消防職員18名が救援活動に出場する。
- ・第1回避難所運営関係者会議を稲城市内各小中学校において実施する。
- ・稲城市地域防災計画の修正及び追加を行う。
- ・平成24年度から開始していた防災行政無線のアナログ波からデジタル波への無線方式の変更が完了する。
- ・東京防災セミナーを実施する。(期間中の参加者102名)
- ・学生消防団員の就職活動を支援するため、「稲城市学生消防団活動認証制度」を開始する。
- ・消防職員定数を92名から110名に改める。
- ・消防団第二分団詰所建替工事に伴い、仮設詰所により運用を開始する。
- ・押立地区少年消防クラブ前委員長清水政志氏が優良少年消防クラブ・指導者表彰(総務大臣賞)を受賞する。

- ・調布小型機墜落事故 死者3人、負傷者5人
- ・川崎市簡易宿泊所火災 死者10人
- ・口永良部島噴火
- ・新幹線放火火災

平成28年
(2016年)

- ・第三次稲城市消防基本計画を策定する。
- ・平成26年に廃車した消防ポンプ自動車を公益財団法人日本消防協会を通してスリランカ民主社会主義共和国に寄贈する。
- ・市内小中学校及び複合施設ふれんど平尾に災害時生活用水井戸の整備が完了する。
- ・内閣府主催の災害避難カードモデル事業で、大丸自治会が作成した災害避難カード及びマイマップを大丸地区に配布する。
- ・消防団第二分団詰所を建て替え、東長沼地区の防災拠点施設としての機能を充実し、恒久的施設として運用を開始する。(耐火造2階建)
- ・稲城市消防団条例を改正し、消防団員の任用要件を市内在勤者に拡大する。
- ・消防団長松本幸次郎氏が藍綬褒章を受章する。
- ・第30回消防団員意見発表会(東京都)において、第五分団加藤翔団員が優秀賞を受賞する。
- ・稲城長峰スポーツ広場管理棟に併設する防災倉庫を地域内輸送拠点として運用を開始する。
- ・平成28年熊本地震に伴い、地域内輸送拠点である稲城長峰スポーツ広場を活用し、被災地である熊本市、宇土市及び別府市へ物資の緊急支援を行う。
- ・台風9号の上陸に伴い、稲城市で初めて土砂災害に関する避難準備情報及び避難勧告を発令する。
- ・平成28年度第1回避難所運営関係者会議を市内中学校ブロックごと実施する。

- ・熊本地震 死者249人、負傷者2,790人
- ・相模原障害者福祉施設殺傷事件 死者19人、負傷者26人
- ・新潟県糸魚川市大規模火災 負傷者17人、焼損面積4万㎡
- ・長野県碓氷バイパス観光バス横転事故 死者15人

平成29年
(2017年)

- ・稲城消防署上平尾消防出張所を開所し、消防ポンプ自動車1台、高規格救急自動車1台を配置する。
- ・8月1日より小型無人航空機（ドローン）の運用を開始する。
- ・空気式救助マットを整備する。
- ・平成29年度第1回避難所運営関係者会議を市内中学校ブロックごとに実施する。
- ・第47回東京都消防操法大会ポンプ車操法の部において第一分団が優勝する。
- ・台風21号の上陸に伴い、稲城市避難勧告等に関するガイドラインに基づき、土砂災害に関する避難準備・高齢者等避難開始情報を発令する。
- ・平成29年度稲城市地域防災訓練において、若葉台地区自主防災組織が主体となって避難所設営・運営訓練を実施する。
- ・新機能搭載の消防ポンプ自動車を第三、第六、第七及び第八分団に配備し、運用を開始する。
- ・地域配備消火器等の更新整備を開始する。
- ・避難施設へ避難者や帰宅困難者の方が利用できるWi-Fiネットワークの導入を開始する。
- ・消防団が総務省消防庁長官表彰旗を受章する。
- ・坂浜地区少年消防クラブ委員長大塚謙一氏が優良少年消防クラブ・指導者表彰（総務大臣賞）を受賞する。

- ・埼玉県三芳町倉庫火災
負傷者2人、焼損面積4万5,000㎡
- ・九州北部豪雨 死者39人、行方不明者4人、負傷者28人
- ・東京都中央卸売市場築地市場場外火災
- ・メキシコ中部地震
死者333人、負傷者1,200人以上
- ・長野県消防防災ヘリコプター墜落事故 殉職7人

平成30年
(2018年)

- ・消防団長松本幸次郎氏が東京都三多摩消防団連絡協議会会長に就任する。
- ・女性防火クラブ会長井上タカ子氏が安全功労者総務大臣賞を受賞する。

- ・大阪北部を震源とする地震
死者4人、負傷者408人

受賞歴

消防団

団体表彰 (昭和23年から平成30年まで)

消防団表彰

表彰者 (団体)	表彰名	回数	表彰年度
総務省消防庁	功労表彰 (竿頭綬)	1	平成9年
	功績表彰	1	平成19年
	長官表彰 (表彰旗)	1	平成29年
日本消防協会	表彰	1	昭和42年
	優良表彰 (竿頭綬)	1	昭和57年
	表彰旗	1	昭和60年
一般社団法人 東京都消防協会	優良表彰	18	昭和30年より
	優良表彰 (団旗)	1	平成2年
	功労表彰	1	平成19年
東京都知事	優良表彰 (竿頭綬)	1	昭和48年
	感謝状	1	昭和49年
	功労表彰	1	平成4年
	消防褒賞 (竿頭綬)	1	平成22年
東京消防庁	総監賞	1	昭和59年
	総監賞 (特 別)	2	昭和63年・平成13年
	総監賞 (竿頭綬)	7	平成8・11・12・17・18・25・28年
	総監賞 (表彰旗)	1	平成21年

分団表彰

表彰者 (団体)	表彰名	件数	表彰年度
三多摩消防団連絡協議会	優良賞	44	昭和49年より毎年
	功績表彰 (火災防ぎよ)	13	平成19・21年

個人表彰 (平成10年以降の表彰)

叙 勲

受章者	受章時階級	表彰名	表彰年度
田 中 甚太郎	元 団 長	瑞 宝 双 光 章	平成16年
上 原 健 次	元 団 長	瑞 宝 双 光 章	平成23年
情 野 亨	元 団 長	瑞 宝 単 光 章	平成23年

褒章

受章者	受章時階級	表彰名	表彰年度
松 本 幸次郎	団 長	藍 綬 褒 章	平成28年

消防庁長官表彰

受章者	受章時階級	表彰名	表彰年度
情 野 亨	団 長	功 労 章	平成15年
松 本 幸次郎	団 長	功 労 章	平成25年
馬 場 芳 則	副 団 長	功 労 章	平成28年

東京都功労者表彰

受賞者	受賞時階級	表彰名	表彰年度
情 野 亨	団 長	功 労 賞	平成17年
松 本 幸次郎	団 長	功 労 賞	平成21年
馬 場 芳 則	副 団 長	功 労 賞	平成26年

東京都知事褒賞

受賞者	受賞時階級	表彰名	件 数
城 所 達 也	副 団 長	消 防 褒 賞	他10件

日本消防協会表彰

受賞者	受賞時階級	表彰名	件数
松本 幸次郎 城所 達也	団長 副団長	勤続章 精績章	他5件

東京都消防協会表彰（功労章）

受賞者	受賞時階級	表彰名	件数
八木原 公成 進藤 典吾	分団長 分団長	功労章 優良章	他19件 他85件

東京消防庁消防総監 感謝状

受賞者	受賞時階級	表彰名	表彰年度
上原 健次 情野 亨	団長 団長	感謝状 感謝状	平成13年 平成19年

三多摩消防団連絡協議会表彰

受賞者	受賞時階級	表彰名	表彰年度
情野 亨	副団長	功労章	平成10年
松本 幸次郎	副団長	功労章	平成16年
情野 亨	団長	特別功労章	平成18年
馬場 芳則	副団長	功労章	平成22年
松本 幸次郎	団長	特別功労章	平成25年
城所 達也	副団長	功労章	平成28年

東京都消防操法大会



平成17年 第35回大会 優勝
第一分団



平成29年 第47回大会 優勝
第一分団



東京都消防操法大会
優勝旗

平成17年 第35回大会 第一分団
平成29年 第47回大会 第一分団

消防団員意見発表会



平成22年 第25回 最優秀賞
第一分団(団員) 涌田 恵一郎



平成27年 第30回 優秀賞
第五分団(団員) 加藤 翔

消防操法審査会年度別入賞分団一覧表

年度	大会回数	優勝	準優勝	第3位
昭和46年	第1回	第二分団	第七分団	第三分団
昭和47年	第2回	第二分団	第七分団	第三分団
昭和48年	第3回	第二分団	第七分団	第五分団
昭和49年	第4回	第二分団	第七分団	第五分団
昭和50年	第5回	第三分団	第七分団	第五分団
昭和51年	第6回	第二分団	第一分団	第七分団
昭和52年	第7回	第二分団	第一分団	第五分団
昭和53年	第8回	第一分団	第二分団	第五分団
昭和54年	第9回	第一分団	第二分団	第七分団
昭和55年	第10回	第一分団	第七分団	第二分団
昭和56年	第11回	第一分団	第五分団	第二分団
昭和57年	第12回	第一分団	第五分団	第六分団
昭和59年	第13回	第一分団	第五分団	第二分団
昭和61年	第14回	第一分団	第五分団	第二分団
昭和63年	第15回	第一分団	第五分団	第二分団
平成 2年	第16回	第五分団	第一分団	第二分団
平成 4年	第17回	第五分団	第一分団	第二分団
平成 6年	第18回	第一分団	第二分団	第五分団
平成 8年	第19回	第一分団	第四分団	第二分団
平成 10年	消防団創設50周年 記念消防操法大会	第一分団	第二分団	第五分団
平成 12年	第21回	第一分団	第三分団	第二分団
平成 14年	第22回	第二分団	第三分団	第五分団
平成 16年	第23回	第一分団	第三分団	第二分団
平成 18年	第24回	第一分団	第三分団	第六分団
平成 20年	第25回	第一分団	第五分団	第六分団
平成 22年	第26回	第五分団	第一分団	第三分団
平成 24年	第27回	第五分団	第一分団	第六分団
平成 26年	第28回	第一分団	第五分団	第二分団
平成 28年	市制45周年 第29回	第一分団	第五分団	第八分団
平成 30年	消防団発足70周年 第30回	第一分団	第七分団	第八分団

消防本部

被災地支援に対する表彰



平成16年
新潟県中越地震における被災地支援に対する表彰状



平成23年
東日本大震災における被災地支援に対する表彰状



平成20年
新潟県中越沖地震における被災地支援に対する感謝状



平成27年
関東東北豪雨における被災地支援に対する表彰状



平成23年
東日本大震災における被災地支援に対する表彰状

救助技術大会における表彰



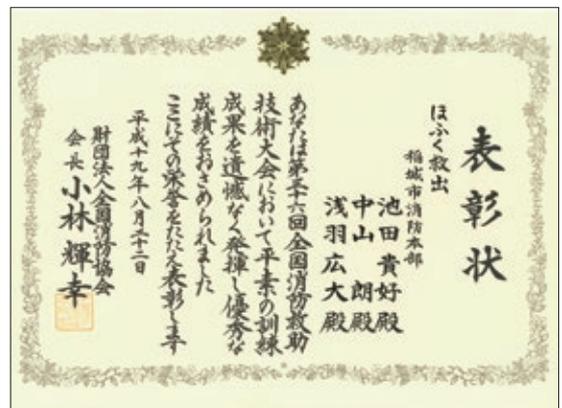
平成13年
消防救助技術関東地区指導会「ほふく救出」
における表彰状



平成13年
消防救助技術関東地区指導会「基本泳法」
における表彰状



平成16年
消防救助技術関東地区指導会における表彰状



平成19年
全国消防救助技術大会における表彰状

消防団歴代幹部

1 歴代団長・副団長



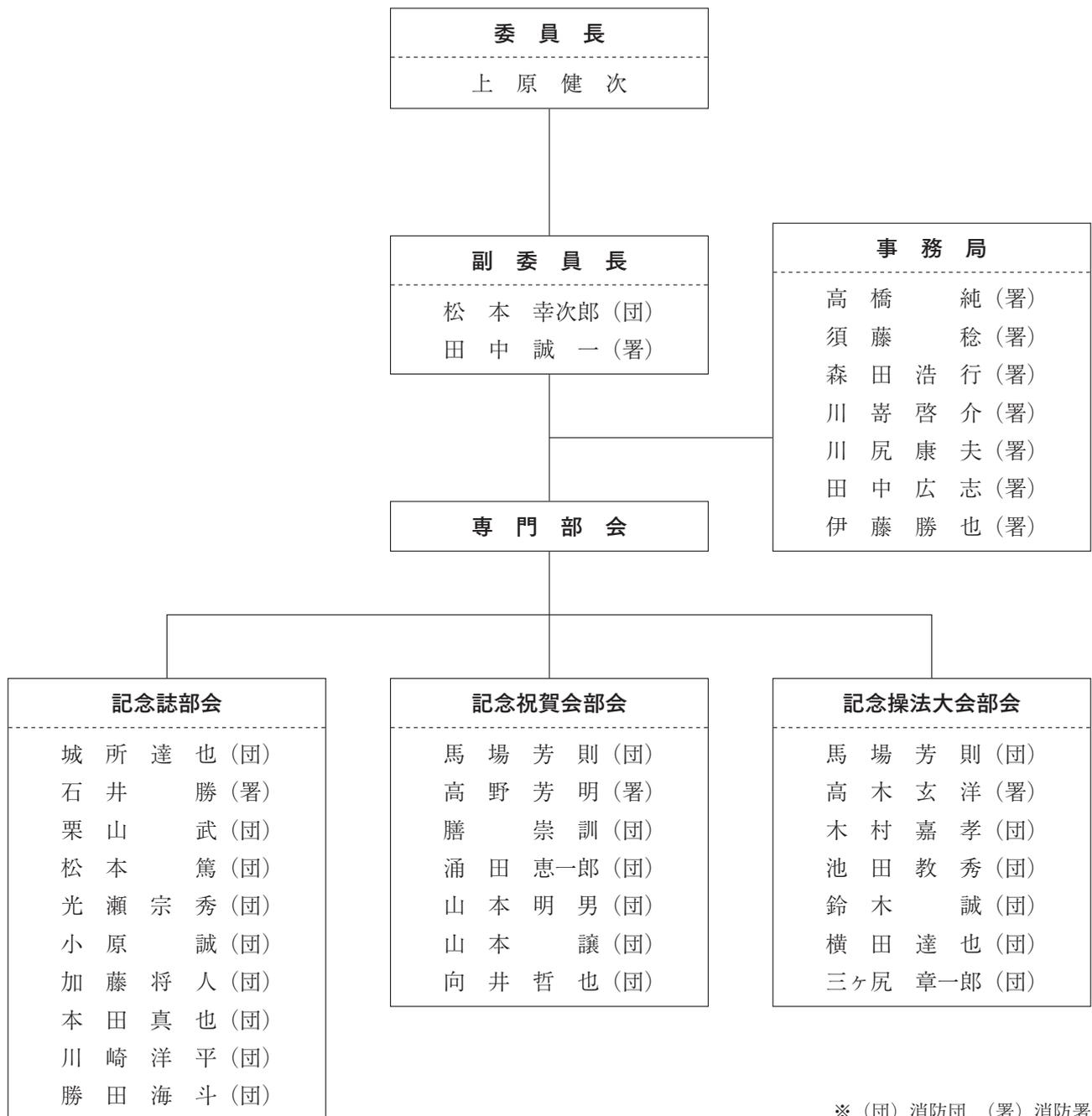
消防団記念バッジデザイン

	団 長	副団長	副団長	
昭和23年～	田中 清	榎本喜代美	原田 潔	
昭和25年～			石井 桂治	
昭和26年～				
昭和27年～				
昭和29年～				
昭和31年～				
昭和33年～				
昭和35年～				
昭和37年～				
昭和39年～			石井 桂治	青木 武男
昭和41年～				
昭和43年～	田中甚太郎			
昭和45年～	青木 武男	田中甚太郎	榎本 保	
昭和47年～	榎本 保		高橋 生司	
昭和49年～				
昭和51年～				
昭和53年～	田中甚太郎		高橋 忠雄	
昭和55年～				
昭和57年～				
昭和59年～				
昭和60年～		上原 健次		
昭和61年～				
昭和63年～				
平成2年～	上原 健次	情野 亨	大久保眞一	
平成4年～				
平成6年～				
平成8年～				
平成10年～	情野 亨	馬場芳則	松本幸次郎	
平成12年～				
平成14年～				
平成16年～				
平成18年～				
平成20年～			松本幸次郎	城所達也
平成22年～				
平成24年～				
平成26年～				
平成28年～				
平成30年～				

2 歴代分団長

	第一分団長	第二分団長	第三分団長	第四分団長	第五分団長	第六分団長	第七分団長	第八分団長
昭和23年	原島 兼幸	山田 収蔵	石井 桂治	石井 利司	大塚 新造	鈴木 清	川崎 栄一	
昭和24年	小山 利忠	呉地 作造	芦川 行雄			石井 栄一		
昭和25年		川島 愛作	藤井 三郎		高橋 健治	粕谷 喜一		
昭和26年	城所貞次郎							
昭和27年	青木 武男	松本秋二郎	太田 昌俊	石井 昇作	市村 正美	石井 一雄	金井 信治	
昭和29年	原田 久雄	加藤 六一	齋藤 幸雄	松本 英夫	市村 勇	石井 正治	杉本 静雄	
昭和31年	恩田 賢二	内田富士男	大久保利政	小池 信之		白井 利良		
昭和33年	青木 正次	阿部 優	芦川才一郎	榎本 益治	榎本 源治	馬場 保雄	横田 愛吉	
昭和35年	原田 栄一	田中甚太郎	松本 幸治	榎本甲子次	榎本 保		土方 隆治	
昭和37年	長坂 利助	増岡 善吉	田中 俊一	松本 清三	金子 重行	鈴木 俊助	川崎 盛次	
昭和39年	高橋 生司	篠崎 明	齋藤 賢	石井種太郎	加藤 栄一	白井 季男	川崎 喜助	
昭和41年	高橋 大助	宮崎 文三	川島 清	岡田 菊治	榎本 茂樹	石井 金治	川崎 昭雄	
昭和43年	原島 幸重	福島 佐一	梅沢 晃	小宮 重蔵	高橋 忠雄	番場 正夫	小山 陽	
昭和45年	原田 正敏	大河原克己	大久保真一	石井 太一	中山 哲夫 大塚 利一	宮田 光治	上原 下一	
昭和47年	原島 信治	川島 実	吉野 孝男	小宮 忠雄	伊藤 幹男	馬場 勲	川崎 増次	
昭和49年	小泉 貞男	進藤 力	大久保久夫	藤田 敏夫	上原 健次	白井 正之	清水 敏夫	
昭和51年	城所紘太郎	石田 正人	若林 久雄	石井 隆司	榎本 正一	馬場 典男	榎本 忠義	
昭和53年	情野 亨	篠崎 弘志	川 秀武	磯川 尚人	井上 正夫	石井 洋平	榎本 勝利	
昭和55年	原島 克次	森 正幸	石坂 清	松本 正昭	多田野耕作	鈴木 貢	清水 洋	
昭和57年	原田 嘉茂		石井 直治	石井 猛	蓑輪 忠	馬場 房義	川崎 美壽	
昭和59年	栗山 勲	宮寄 隆利	石井 鉄男	小池 勝美	市村 重利	石井 静雄	木村 重樹	
昭和61年	小沢 伸夫	田中 純正	石井 守	岡田 吉男	榎本 三守	白井 修	川崎 勤	
昭和63年	原島 茂	鈴木 明弘	太田 昌和	小池孝太郎	榎本 佳則	馬場 昇	川崎 信一	
平成 2 年	原島 源夫	奈良部義彦	芦川 孝	松本幸次郎	榎本 勝美	石井 敏男	杉本 康雄	
平成 4 年	青木 優	松本 一宏	大貫 哲男	三上 剛	榎本 修明	馬場 芳則	小山 敏保	
平成 6 年	笹久保浩司	加藤 和弘	北浜 堅一	小宮 重樹	榎本 久春	石井 篤司	榎本 典之	
平成 8 年	城所 達也	宮崎 伸治	大久保光義	石井 仁	宮嶋 勝康	浅水 博	高田 良晃	
平成10年	高橋 勝浩	進藤 洋一	大久保雅行	市川 孝弘	加藤 芳之	八木原公成	川寄 智章	
平成12年	城所 貞夫	進藤 典吾	鈴木 健志	石井 譲	伊藤 孝司	馬場 実	横田 一美	
平成14年	原田 研二	山中 英明	黒田 守人	松浦 憲一	清水 隆男	石井 昭彦	川崎 賢吾	小磯 保夫
平成16年	城所 一也	奈良部勝将	大久保勝敏	松原 康弘	榎本 光晴	白井 智和	菅野 英之	
平成18年	小沢 要	石田 浩史	船木圭一郎	長田 伊雄	中山 宏之	石井 孝洋		土方 健一
平成20年	嘉山 和伸	川島 幹雄	齊藤 良文		榎本 清隆	馬場 美敏		
平成22年	原田 武	津田 淳	石井 圭	松原 一正	伊藤 要	渡邊 誠	小関 智洋	三ヶ尻章一郎
平成24年	原田 一男	長島 厚文	梅沢 卓哉	村田 雄一	伊藤 達也			
平成26年	小泉 忠		石井 良幸	青野 武史				
平成28年	栗山 武	松本 篤	光瀬 宗秀	芦川 康英	加藤 将人	本田 真也	川崎 洋平	北鶴 龍朗
平成30年	植松 孝之 城所健司 5月13日～	山本 明男	山本 譲	小原 誠	池田 教秀		川崎 琢磨	伴 直樹

稲城市消防周年記念事業実行委員会組織図



編集後記

本記念誌作成にあたり、稲城市消防周年記念事業実行委員会の一部会として「記念誌部会」が設置され、消防団OBの方々を中心に消防本部の事務局との協働で編集作業が進められました。

前回(平成10年)発刊された「消防団創設50周年、消防本部開設30周年記念誌」以来の発行ということで、なるべく重複を避け、内容的にはコンパクトなもの、そして文章より写真を多く盛り込み、できるだけ見やすい紙面ということを基本的な考え方として作成いたしました。

稲城市の安全、安心を支えてこられた多くの先人の功績や消防団・消防本部の歴史を伝えるものとするため、どのような内容にするか、記念誌部会の委員全員で意見を出し合い、写真や資料収集等、困難な編集作業に取り組み、本記念誌の完成となりました。

少子高齢化が継続する社会にあって、稲城市は人口増加、市街地の発展が進む希望あふれる街ですが、その一方で災害が複雑多様化し、救急件数の増加にみられるように、消防の役割がより重要となっていることも否めません。

そのような状況の中、本記念誌が、稲城市の消防の歴史を伝える貴重な資料となり、稲城の消防行政が今後ますます発展していくための一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、本誌発刊にあたりご協力いただきました多くの皆様方に、心より感謝申し上げます。

稲城市消防周年記念事業実行委員会
記念誌部会 部長 城所 達也



消防周年記念事業実行委員会のもよう



記念誌部会のもよう



平成30年 消防出初式での一斉放水(ドローンから撮影)